

ふるさと奥尻通信

令和5年12月22日
奥尻町教育委員会発行
事務局:01397-2-3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

巻頭言

「ヒスイの大勾玉は、現存のものでは少なくとも五指に入る傑物、島のシンボルにしてもおかしくないもの」勾玉を実見した、故 森浩一同志社大学教授の評である。1992年6月15日。

特集 勾玉総括プロジェクト 前編

教育委員会では令和4年度に「勾玉総括プロジェクト」を行いましたので、その概要を簡単にお知らせします。

昭和51年(1976)～同53年(1978)にかけての青苗遺跡調査で発見された「墳墓」の副葬品である、丁字頭勾玉など玉類と鉄刀及び人物像について、専門家による詳細な検討結果を報告書にまとめて刊行したものです。

この調査は、奥尻島内で初めての大規模な遺跡調査で、縄文時代前・中期と擦文時代の文物が見つかりましたが、報告書の作成が不十分で詳しい状況が判らなくなっていました。

今回は、出土品を詳細に観察、分析して資料価値を高めるとともに、奥尻島に渡った勾玉の謎の解明することを目的として4名の専門家に調査を依頼し、論じてもらいました。丁字頭勾玉、ガラス玉、水晶丸玉などについて大賀克彦氏(奈良女子大学)、ガラス玉の成分分析について田村朋美氏(奈良文化財研究所)、鉄製の大刀について菊地芳朗氏(福島大学)、墳墓の様子について小嶋芳孝氏(金沢大学)に分析をお願いし、歴史的背景や想定される被葬者像について検討してもらいました。

「墳墓」出土品の概要

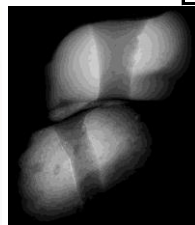
●●玉類●●	
・翡翠丁字頭勾玉 ヒスイ製	全長50.20mm、幅21.55mm、質量52.3g 1個
・水晶切子玉 水晶製	全長28.80mm、幅1.800mm、質量12.7g 1個
・水晶丸玉 水晶製	直径9.30mm～11.40mm、厚さ8.15mm～10.80mm 質量0.9g～1.9g 29個
・ガラス丸玉 コバルト着色のガラス製	直径7.66mm～12.75mm、幅7.68～16.77 質量1.1g～2.5g 14個
・滑石丸玉 滑石	直径7.75mm～10.05mm、厚さ11.45mm～13.55mm 質量0.9g～1.6g 3個
●●鉄器●●	
・大刀 鉄製	全長38.2cm、幅3.4cm 1点



勾玉、ガラス玉、水晶玉など



ガラス玉の接写と透視画像(融着)



ガラス玉と鉄の大刀は『青苗遺跡重要資料総括報告書』より転載

鉄の大刀

●玉類●

丁字頭勾玉は3世紀後半～4世紀半ばに畿内かヒスイ原石産地の新潟県姫川流域で制作され、長く伝世してきたもの。大型で状態が良い。

水晶丸玉は8世紀～9世紀に畿内の都や寺院などで見られ、大変希少価値のあるもの。この水晶丸玉は広く流通するものではなく、入手先は都城周辺に限定されるので、島の在住者が朝貢のため、または渤海使に同行して都まで行って持ち帰ったのではないか。

ガラス玉は6世紀半ば～7世紀中葉に国内で二次加工された大型品だが、熱を受けて変形している。玉はコバルトで紺色に着色された植物灰タイプのソーダガラスを主要素材として巻き付け法によって製作された。

このガラス玉は玉類が豊富に副葬される「末期古墳」のある東北北部の太平洋岸から、水晶製切子玉や滑石製丸玉とともに島に流入した可能性が高い。

●鉄器●

大刀は本州の古墳時代～古代の墳墓から出土する大刀と大きく変わらない。

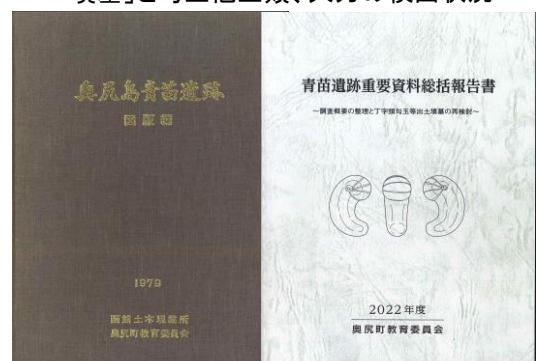
秋田城跡(秋田県)か郡山遺跡、多賀城(ともに宮城県)等で造られた7世紀後葉の前後1世紀頃のもの。

秋田からであれば日本海ルートから、郡山や多賀城からであれば太平洋ルートからもたらされた。

また、玉類と鉄刀が埋められた年代や埋葬された人物像については、先生方の間で見解が分かれました。つづきは次号後編でお知らせします。



「墳墓」と勾玉他玉類、大刀の検出状況



刊行した報告書(右)と最初の報告書(左)は海洋研修センター図書室でご覧ください。



赤石地区のお年寄りに昔の祭りの話を聞きました。「昔は、武士川地区までが赤石村の範囲だったので、山車は今の烏頭川まで行った。小林さんの家の辺りに旗竿と御神燈を下げていた。神様の行列、山車の順で行列して、山車の前後に消防団員が出て歩いた。力持ちが梶取りした。家の前にテーブルが出てあって、一軒ずつ止まって飲み食いしていくので、酔っ払う人がたくさんいた。午前と午後で交代して参加するような感じだった。宵宮と本祭の日は沖止めにした。戦後、若者が帰ってきていて人数が多かったが、その後自衛隊に入る若者がけっこういて、減っていった」



学芸員オススメの一冊をご紹介します。本は海洋研修センター図書室で借りられます。

土偶を読むを読む
望月昭秀(縄文ZINE)編

土偶のモチーフを解明したとし、さらに考古学会の男性優位や封鎖性に一石を投じて一般にウケたのが竹倉史人の『土偶を読む』である。そこに真っ向から対峙したのが本書である。日頃から考古学に真っ直ぐに向き合っている編集者や考古学者が、結論を出しにくい縄文人の世界観に対して、学問的に出した答えがここにある。

奥尻の釣り 2023年号

2023年の奥尻の釣り景況を総括します。年明けは沖のサクラマスが好調でしたが、岸寄りも多くなく、小型が目立ちました。それが終わる頃、3月下旬から例年通り春ボツケの回遊があり、GW頃まで海岸は賑わいました。一方、産卵期のソイ類は岸寄りが少なく、岩場でソイ釣りしていた人は面白くない顔をしていました。カレイ類は漁師の網が少なかったせいか、奥尻港内では大物も数多くでていました。6月には養殖サーモンが販売されて好評。暑い夏場の一休みを挟んで、10月頃からアジ、サバ類が連日好調で、次第に成長して12月初旬頃まで大物が回遊する状況でした。ようやく寒気が入り出した11月中旬からカジカが寄りはじめ、ポンポン釣れるので大きな頭が岸壁にたくさん並んでいました。鍋が最高に美味しいですね。

昭和奥尻生活詩 冬休みの生活 第5回

釣石尋常小学校高等科一年生 文集「島の子」第三号
 てい涙とげがとが言うのたをん姉だ何の何さを
 したを話してし思ひし父。済でのろか家時んとへつ
 よ、落し来出たいにたがそしい顔う喧へもとっ姉づ
 う僕し乍たて事切くの帰のるを嘩逃口姉てのき
 がはたらん行かるそだっ内炉。見こで喧が賣の家
 な色。下だけら様うてにの母らんもて嘩あっそ
 か々父をー喧ににと来木側もとなし来をまたう
 ったな向とと嘩ーも聞た出へ何ま事てるしりりど
 った事母て涙どになちく。して来時だを逃のて合しう
 づ。ををもて聲ななくと父は行坐間って。るない金
 く。考皆ボでるっし姉は行坐間って。るない金
 え黙ロボかてちてはーっってな来今時いる持
 さっりツらおよいさ姉たてか涙がた日々のがで
 ってとく逃父ったもど僕い用ぐらのも僕で姑米

近躍テん先なのちら俊ま委
 釣がイで発つ中ヤ社雄しチ十
 り期も、たに一会次た一月
 も待ブこ中人はで人長。ム月
 始さレな継もプ鳴まで野に一
 めれイせぎい口らです田新日
 たてやる、る野し野。市戦より
 そいーオ抑そ球、球学出力、
 うまとーえう選対の生身が、
 ですしルとで手戦ピ時の加我
 す。てマ、すに相ッ代長入が
 。最活イな。手か濱し教



発掘中の様子

定し中期で物紀が物で玉ま青菊
 でた葉へ多はか、の、がし苗地福
 す。く十無墳発そ出た遺芳島
 。来の世出くに墓見のた。跡朗大
 年土紀で、合のを解、場の教学
 度器前いこ致埋目明墳所試授考
 本が半たれす葬指に墓は掘と古
 格みく擦まる年しつ、調学学
 発つ十文でよ代まなのか查生研
 掘か一時にうへしが隣つを五究
 のり世代周な八たる接て行名室
 予ま紀後辺遺世 事地勾いで

青苗遺跡を試掘

をりを張毎ま体労のでてて
 見に掘つ日しの困で久もし前
 逃陽りて発たの衰憊す々暑ま号
 すを出い掘。えしかのくいから
 ま浴した現十をてら遺てまら
 いびたの場五感し、跡暑し少々
 とた時でで年じま心調くた。間
 思一のす元くるい身查て、今
 い瞬、が気ら年まとをしそ夏
 まの千：にいともしたのは空
 す表年土頑前な。にたのは
 情ぶ器はり。疲も中とい

よすも海取ででまど報すすど
 ろの再洋りお、し、誌。る。年
 しで利研に知教たまやそこ、未
 く、用修伺ら育らた電のと古
 おごすせいせ委、は話際も本
 願協ンまく員ゴ古帳に、多
 い力場タすだ会ミい、い古
 しく合し。さのに写チ昔と
 まだが図古い。学投真ラの思
 す。さあ書本。芸げがシ町の
 いる室は引員なあなのま
 。まで、きまいり 広 分



ソイ類3種類そろい踏み

新水之記録(編集後記)